
フラン姫の一存

紅姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フラン姫の一存

【Nコード】

N1442U

【作者名】

紅姫

【あらすじ】

101回目のヒロインのフラン姫の日常を描いたストーリーです。過度な期待はしないでください。

反逆のフラン姫

フラン「私思うのよね！」

ルーク「どうしたんですか？フラン様？」

フラン「ほら、私って元々、101回目の異世界召還でのヒロインとして詳細設定までして伏線まで作られてるのにそれすら回収せずに本編が終了しちゃてるじゃない？」

フラン「さらに、なんで男の雪ちゃんかいつの間にか悲劇ヒロインの座を獲得しちゃてるのよ」

ルーク「そういえば、そうですね。でもその内、書いてくれますよ。」

フラン「ちょっと、本編ヒロインとしてレギュラー扱いだった私と一発ギャグキャラ扱いだったルークと一緒にしないでよね！」

ルーク「まあまあそんなに怒らないくださいよ」

フラン「それにね、ルーク最近、レギュラーキャラに昇格して調子に乗ってると思うのよね？」

ルーク「でもそれを言いますと、資料設定だけ詳細にして一切文章にすら出てこない3人の公爵とかもっ　と気の毒だと思えますよ？」

フラン「うっ！」

ルーク「それに外伝でもフラン様の名前は出て来てるじゃないですか？他の公爵とか本当に悲惨な扱いですよ？」

フラン「でも、やっぱり私としてはヒロインな訳だし、それなりの出番が欲しいわけなのよね。」

ルーク「はあ？そんなんですか？」

フラン「うん、それに私の料理が最終兵器とか失礼だと思わない？汚名挽回しないうちに行けないと思うのよね」

ルーク「それを言うなら汚名返上では・・・？」

(汚名を挽回してどうするんですか・・・)

フラン「とにかくね！ちょっと筆者と話して私の冒険を書いてもらおうと思うわけよね！」

ルーク「それは、筆者に負担をかけるのでは？」

フラン「大丈夫よ、いざとなったら泣き落とし使うから！」

そんな夢をフランはベットの中で寝ながら夢の中でやり取りしてた。その頃、四条家で寝ているルークもうなされていたとかいないとか？

舞台裏作戦会議

ここはフレンドリアル公国フレイア城のある一室にあるフラン姫が作った作戦室がある。

その部屋の前には、一つの立て札が立ててあり

『MOBキャラに対する扱い救急対策』

と書いてあった。

部屋の中にはいくつもの木の長い机が並べられており、その数は約100!

そしてその前に座っているのはフレイア城で仕事をしているメイド隊300人とルークが指揮している宮廷魔法騎士団200人である。

部屋で陣頭指揮を取っているのはこの国の姫であるフランであった。

そして、今意見を出し合いながらそれを纏めているのはメイド長に昇進したエリザベスである。

「えーそれでは、今上げられた内容ですと映画を作った方がいいという意見が圧倒的ですがどうでしょうか？フラン姫？」

「映画ねー。もっとパツとしたものがないよね!」

そういいながらユーグネスに視線をフランは向けた。

「なんで、俺までここに呼んでんだよ！どう考えても俺は関係ないだろww」

「ユーグネス殿その言い方は少しぶしつけどと思いますよ？」

エリザベスが冷たい視線でさらに追撃を居入れてくる。

「大体、ユーグネス殿は一時的には雪殿と肉体関係を結んでいます
が、それ以降微妙な扱いじゃないですか？ランツェルって人に恋人
の座奪われてますし〜私達と大差ないんじゃないですか？」

「てめー文句あるなら表でろよな！お前にそこまで言われる義理は
ないんだよ！！」

一触即発な空気を察してすかさずフランが仲裁に入る。

「まあまあ、ユーグネスさんもこれを飲んで少し落ち着いてくださ
い。」

渡されたカップに入ってる七色の物体を見ずにエリザベスに敵意の
視線を向けたまま飲むが

「グハツ・・・ドサツ」

ユーグネスが机の上で泡を吹き出しながら寝ていた？

「それで、フラン様。私達を公爵領から呼び出して何をしたいので

すか？」

リアネーテ・フォン・ストラウスがブロンドの長い髪を揺らして聞いてくる。

「ええ、もちろん私達もそれを知りたいですわ」

フィリア・フォン・ロアスターも赤い髪を触りながら聞いてきた。

「簡単に言つとね、MOBキャラにも光を当てて活躍の場を作者から奪おう対策なのよ！」

ドーンという擬音が流れるほどフランが胸を張って言った。

「おおー」

それならばリアネーテもフィリアも資料設定だけで本編が終つて一切出てこなかったことに対して不満を抱いてた事もあり納得する。

「はい！フラン姫」

「はい、なんですか？ハンスさん。」

「俺の設定も何か女好きのふしだらな男で終つてるじゃないですか？名誉挽回したいんですよね」

「いや、お前、女にだらしねーじゃん」

と魔法騎士団が声を揃えて言う。

「で、結局はどうするのですか？フラン様」

「そうね、一回学園恋愛物でやってみない？」

リアネーテが賛同する

「それはいいかもですね、それで一回やってみましょう。」

こうして次回作が決まった。

舞台裏作戦会議（後書き）

次回は学園物です

フランの団員構成表ぶろふいーる

人物編集

フラン・フォン・デ・フレンリアル

フレンリアル公国の王女 年齢 17歳

身長 155cm スリーサイズ それなり

容姿 琥珀色の眼 パール色の髪の毛のセミロング

趣味 魔法・料理

武器 指輪の形状をした事象を操る魔法書^{リング}

特徴 複写眼ですら、存在保持が確認出来ない部分を含んでいる。
王族全てに限った事であるようだが解析不明の状態

リアネーテ・フォン・ストラウス

ファーブニルの娘であり、後継者。

フレンリアル公国南方領地・公爵家

年齢 19歳

身長 170cm 3サイズは秘密

容姿 ブロンドの髪に金の瞳

特徴 実は、ある秘密がある困った令嬢。

フィリア・フォン・ロアスター

イルアデル公爵の娘であり継承者

フレンリアル公国西方領地・公爵家

年齢 22歳

身長 168cm 3サイズしーくれつと

容姿 紅髪 金眼

エリザベス

フレリア城メイド長

年齢 18歳

身長 157cm

容姿 紫眼 薄い金色の髪 3サイズ 86 58 89

ユーグネス・フォン・プライト

ワーカス公爵の孫にあたり、父のエルユードからの推薦により就任
フレンリアル公国東方領地・公爵家

年齢 20歳

身長 195cm

容姿 黒髪に金眼

特徴 父、エルユードより戦闘訓練を幼少より受けており九頭竜と
いう武術の使い手。冒険者レベルはS+

父譲りの精霊魔法と王家特有の特殊魔法も使う事ができる。
雪を母親アイナの策略に乗り夜這いを成功させて肉体関係を築いて
しまう、雪の事は大好き。

現在、雪を探す為に方々に手を打っている。

ハンス

宮廷魔法騎士団2番隊隊長

年齢 26歳

身長 182cm

容姿 薄い桃色の髪 紫の眼

特徴 戦闘レベルは魔法騎士団としては普通だが極度の女好き

世界編集

フレソリアル公国

主に、鉱物資源に恵まれており大陸有数の鉄鉱石産地。王政だが、賢王と呼ばれている王の政策により一般市民の識字率は70%。奴隷制は禁止されている。

現在は先の帝国との大戦後が残っており復旧中
王が復帰し経済が回復中

え？1話で撮影終了なの？

ここはフレンリアル公国王都フレイアにある王立フレイア学院

18歳までの一貫学校である。

「ちこくちこく〜」

一人の少女がパンを口に加えて走ってくる。

どこの風景でも見られる1シーンであるが・・・

それをしてるリアネーテは普通ではなかった。

そのまま、学友であるフィリアに抱きつかうとするが・・・

割って入ってきたハンスにぶつかってしまっていた。

「嫌〜！」

『その身に刻め！神技 ニーベルンヴァレスティ』

「ぐはっ、ぐほっ、へぶらぶし」

ハンスがリアネーテがもつた鞆で滅多打ちにされて通学路にボロ雑巾のように転がった。

まさに見た目すばらったである。

「カットカット！」

フランがハリセンを左手にもっと中止をした。

「リアネーテさん、何、神技発動しちゃてるんですか？そこは男性にぶつかってうれし恥ずかしの恋愛ストーリーが始まるところじゃないですか！」

「え、でも私は男の人が苦手なんですもの」

「男の人って夏とか近く寄るだけで体臭とかきついすわ」

「リアネーテさん、今世界中の男子を敵に回したよね？」

「大丈夫ですわ！私はかわいい女の子ならいける口ですから」

言いながらフィリアを見るリアネーテ。ビクンツ、怯えるように歩さがるフィリア。

「はあ、とりあえずは次いってみようかな？」

.....

とある新入生の入学式の一コマ

「えー、今日はたいへんお日柄もよく」

教壇の上では、グレンダルが太陽の光を頭にあげてキラーン と輝かせたまま校長の威厳を出して生徒に挨拶をしていた。

「っていかどうでもいいんだけどさ、あのツルツパゲ太陽光反射しすぎて何も見えないんだけどさあれって困るよな。」

そう、ユーグネスが言うと、

「そうつすね」

ハンスが続く

「なんで、入学式とか卒業式とかこんなについて意味の無い内容の話が長いんだろっな？意味ワカメだぜ」

「そうつすね」

「しかし、普通外でこんな事するもんかね？日射病で倒れたらどうなんだよ」

「そうつすね」

「なあ、お前さっきからそうつすねしかしゃべってないが何してる

んだ？」

ユーグネスはハンスの方を見ると魔法で作り出した水を鏡のようにして前でたっているリアネーテのスカートの中を覗いていた。

「なあ？ハンス。学校で覗きは行けないと思うぞ」

「学校で覗きは一般的だって書いてありましたよ？」

その言葉にリアネーテは反応し、自分がスカートの中を覗かれてるのを後ろを振り返って確認する。

顔が一瞬で真っ赤になる。羞恥心ではなく怒りであるが……

「な、な、な、何をしてるんですの！！」

右拳がハンスの右頬に当たりそのまま、肩から回転し拳に伝えられたエネルギーでハンスが学友達を巻き込みながらひでぶーと言いがらくるくる飛んでいく。

「ストップ」

フランがハリセンでリアネーテの頭をスパーンと叩く

「リアネーテさん、ハンスのやり方は問題ですけど、女性なのにコクスクリューブローは行けないと思いますよ？」

「だってキモイし……」

そこをフランはスルーして

「次いくわよー」

.....

とある、転校生編

「ねーリアネーテ聞いた？」

「なにフィリア？」

「今日ね、転校生が来るらしいのよね」

「そうなの？」

「ええ、カツコイイ人ならいいわね」

そうしてると先生が中に入ってきた。

ちよびひげを蓄えた先生である。

「えー、愚民の生徒諸君の皆さんに転校生を紹介する」

「入ってきたまえ、」

一人は黒髪黒眼のおやじと黒髪金眼のまだ18歳でも通用しそうな女性である。

「なあ？どう考えても一人はおやじだよな？」

ユーグネスが突っ込み

「あれで俺達と同年代は設定的にムリあるっすよね？」

それにハンスも同意を示した。

横を見ると

リアネーテが

「人妻熟女つてのも萌えるわよね！！」

とか意味の分からない言葉を吐いていた。

その横でフィリアが脳みそ沸いてるんじゃないのかしら？と心の中で突っ込んでいた。

そんなことを纏めた学園物のシリーズ第1弾

フレリア王立学院のギャグパートが試写会で上映されて大変、おいしゅうございましたとなったらしい。

お風呂は一日一回は絶対入るもんなんだよ！

「うわー」

頭をかしゃかしゃかき回してる見た目は美少女が一人豪華な机に向けて何かを書いていた。

「フラン様、そろそろお風呂に入りませんか？」

メイドのエリザベスが主の部屋に入らずに外から声を掛けてくる。

その原因は・・・

部屋の中に散らばってる原稿用紙によるものであった。

すでに畳30畳はあるフランの部屋は原稿用紙が丸まったゴミで数十センチ近くまで詰まれており足の踏み場がないのだ・・・

「フラン様、そろそろ諦めて、出番来るまで待ちましょう。」

エリザベスが真つ当な意見で言ってくるがフランはエリザベスを見て一言

「ここで止めたら負けだと思つのよね・・・」

フラン様は何と戦ってるんですか？と心の中でエリザベスは突っ込みつつ、一日で貯まった原稿用紙をメイド隊と片付けていく。

フランが新しい企画書を考へてる間にも、メイド隊が慣れた手つきで片付けていく。

数十分後にはいつもどおり綺麗な部屋になった。

エリザベスは、ふとフランが座っている椅子を見ると、真っ白に燃え尽きたフランが座っていた。

「エリザベス、私もう燃え尽きたよ・・・真っ白に・・・」

といいつつ、メイドが入れた紅茶を飲んだ。

「フラン様、それではお風呂に行きまして気分転換でもしましょう。」

エリザベスが合図をするとフランがメイドに両脇に抱えられて連れていかれた。

「いやーはなしてーまだ書いて（もごもご）」

エリザベスはそれを見ながら、なんかすごいデジャブを感じるんですよねーと思っていた。

とりあえず、女の子なんですらから一日一回はお風呂に入って貰わないとね！

学校と言えば百合だよ

「私は言っただけだよ！」

そんな事をいきなり言い出したのはこの国の王女フランであるのだけども

「何を言っただけですか？」

「お父さまにね、きちんとした学院を作りましょうって！」

「一応、学院は王立フレリア学院ならありますが？」

それを聞き流しさらにフランは言葉を発する

「違うよ、学費が掛からない学校を作るべきだと私は思うわけなのよねー！」

「たまにはいい事言っただけね」

「たまには余計だけど、企画書を出したら却下されたのよね」

「へーどんな企画書だったんですか？」

「百合が合法化されてる学校ー！」

「あ、そーですか。」

エリザベスはそう言いスルーした。

「だってね！普通の学校だと視聴率取れないとおもっよね？」

何の視聴率ですか？と部屋を掃除しながら心の中で思う

「それにね、あーっ系だと何かいけないと思うのよ。」

さらにスルー

「だから女の子同士なら有りかなくて思ったわけ！」

さらにす（ry

「ねー、エリザベス聞いてるの？」

「まあ一割くらいは聞いてますよ？」

「それって9割は聞いて無いってことじゃないの？」

「あのですね、フラン様、そういう百合関係のアニメはまりあほりつくを購入してアニメを全部見てから考えてください。思いつきでやると失敗しますよ？」

「ちょっと、エリザベス！一応この世界の設定で話してるんだからリアルの話を持ち込むのはよく無いと思うんだよね！」

「そうすっね」

「な！..！」

エリザベスがそつちを見るといつの間にかハンスがいた。

「あ、あなた、王女様の部屋に無断で入るとは死にたいのですか？」

「まって、エリザベス、ハンスにはこれからのレギュラーキャラになつてもらおうかと呼んだのよ」

「は？そんなんですか？」

「で、俺は何をすればいいんですか？」

エリザベスは少し考えてから、窓拭きを依頼した。もちろん高さ6Fにある窓の表側を吹くように指示したわけで足場も無く、レンガを掴みながらの拭きになるわけだが・・

「それでね、学校のことなんだけどね、エリザベスはどう思う？」

「そのネタまだ続いてたんですね？」

そしてハンスが窓外の掴んでいたレンガから手を滑らして落ちて音が聞えた。

人の家の土地を盗みにきたら犯罪だと思つのよね

「領土信販は良くないよ思つのよね!」

でーん!とフランが胸をはってかいた黒板の文字を指差した。

「フラン様、また、いきなりなんなんですか?」

エリザベスが部屋の花瓶を磨きながら聞いてくる。

「だって、以前あった帝国がうちの公国を自国にしようと攻めて来たことがあつたじゃない?」

「なるほど、でも姫様そう言つと領土信販じゃなくて領土侵犯つすよ?」

とハンスが突っ込んでくる。

「詠み方があつてるんだからいいじゃないの!」

キーツとフランが威嚇してくるが・・・

エリザベスはそれを見ながら冷静に突っ込む

「それで話の内容としては尖閣諸島に領海侵犯して、僕の国の方が近いから僕のものダーと駄々を捏ねて世界中に笑いのネタを提供してる中国を題材に上げてきてるといわけですね?」

「ちょっとW何度も言っけどリアルの話を持ち出すのはタブーだと

思いの」

「別にいいじゃないですか？作者が見てるわけでもあるまいし・・・」

「で、姫様は今回のこの話題を振ってきて何をしたいんですか？」

「そこよ！ハンス。私ね、前から思ってたの。自国の領土を侵犯してた国とかに媚びへつらうのが国のTOPがすることなのかなって・・・」

「まあ、たしかにうちのらの世界でそんな事したら速攻戦争になるっすね。」

エリザベスもそれに同意し

「仕方ありませんよ、日本の政治屋と官僚は言えば自己保身の塊の集まりですからどうにも出来ません。」

ベットの皺を直しながらズバリ、エリザベスが突っ込んでくる。

「エリザベス、少しオブラートに話を包もうか？というかリアルの話持ち出しすぎだからw」

「そういえば、フラン様。そろそろお父様から経済の勉強の時間のはずです。そろそろ行かないとまた怒られますよ。」

「あー！」

「逝ってきます〜」

そのままフランは急いで城の廊下に出ていった。

もやしは偉大だなんて思うのよね

ここはフレイア城の中にある一室、フランの部屋

もぐもぐ・・・

「フラン様、何を食べてるのですか？」

「うん？エリザベス？もやしを食べてるんだよ？」

「へーもやしですか？」

「エリザベス、うん、もやしって偉大な食材の一つだよね！」

「どうしてですか？」

「だって、もやしってお味噌汁からサラダからいろんな物に 응용できるじゃない？しかも値段が安いし」

「そうですね。日曜日にやってるトリコの食材GODに匹敵しますよね。値段・供給も見ると・・・」

フランがそれを聞いてあわわとしているが・・・エリザベスはなおも突っ込む

「でもフラン様が食べてるのは中国産ですので中国産は港で検閲の際に長い時間をかけてるため、ほとんど腐った状態の物を薬品で色

だけ戻したのがほとんどなのできちんとお湯を通さないとお腹壊しますよ?」

「ええーそうだったの?」

「ええ、ですから買うときはなるべく国産を買ったほうがいいです。」

「あとは芽と根は予め取って茎の部分がふにゃ〜ってしてるのは捨てたほうがいいですね。」

「へ〜さすがメイド長だね!でもリアルをここに持ち出すのはどうかなって思うよ?」

「当然の知識です。」

「それでなんでこんなにもやしの話題が出てきたのですか?」

「うん、お父様と話して帝国に早い、レパトリー豊富なもやしを向こうで栽培しようって話になったんだけどねそれでその為にちょっと味見してたわけ。」

「味見をするなら国産にしてください。」

「はい」

もやしは偉大だなんて思うのよね（後書き）

体調不良のため、真面目な方の投稿はしばしお待ちください・

困った事・・・

ここは、フレンドリアル公国フレイア城の一室フランの部屋である。

その中では、主のフランが机にぐでーとしていた。

「はあゝあ
」

「どうかしたんですか？フラン様。」

そついいながらも、エリザベスは出来るメイドという感じでフラン
が起きたばかりのベットメイクをしていく。

「うん、実はね、^{ストーリー}物語のネタが無くて困ってるのよね・・・」

それを聞きながら、エリザベスはベットに枕と縫いぐるみをおいて
いく。

「なるほど、それでフラン様はネタが無い事をネタにしちゃえーと
思ってるわけですね。」

「うん、実際そつなんだけど、もう少し遠まわしに言おうね。エリ
ザベス」

「そついえば、フラン様知っていますか？」

「うん？知らないよ？」

「でしようね、まだ話してませんし・・・」

「怒）・・・byフラン」

「むしろ分かったらエスパーという事でテレビ局に売りますよ」

まったく仕方ないなーという感じでふうーと言いながら首をエリザベスが振る。

「で！エリザベスは何が言いたいの？」

「ええ、実はですね。ラーメン屋で使われてる生もやしと普段私達が買ってるもやしの種類と価格が違うという点です。普通に買うと一袋100円程度の物を使ってるお店が多いそうです」

「えーとエリザベス、そのネタまだ続いてたんだ・・・このコーナーって基本1話ごとに終了って流れなはずなんだけど・・・」

「大丈夫です、ネタがないからこそ、出来る業ですね。」

そうなんだ・・・

はあ空が蒼いね・・・とフランは窓から空を見ていた。

とりあえず納得!?

ここはフレンリアル公国フレイア城にあるフランの一室である。

「はふー。」

悩ましげに、お風呂上りの髪が煌く。

「フラン様は髪の毛を梳かされるのが好きですねー」

メイド長のエリザベスはフランに声をかける。

「うん、髪の毛いじられると安心するんだよねー」

「そういえばね、エリザベス! 私思っただよね」

「何をですか?」

「うん、私って見目麗しくて料理も出来る家庭的な所もあって、男性を立てる。とってもお買い得な女の子だと思っただけど、周りは色恋沙汰ばかりなのになのに、なんで私だけこんなにギャグキャラ扱いなのかなって? ってすごい不満なんだよね。」

「そうですか」

「普通だったら、ロミオとジュエツトみたいな物語がストーリーダース単位で来てもいいと思うのよね」

ダンス単位って何回死ぬつもりなんですか？とエリザベスは心の中で突っ込んでいるが・・

「だからね、私にもそろそろ恋のドキドキが必要だと思うのよ！」

「そうですか」

「だからね！舞踏会でも開いて白雪姫と王子さまみたいに恋をしてみたいと思ってるの！」

「毒りんごでも食べるんですか？フラン様は本当に童話を見て言ってます？どう見てもいろんな童話がくつついてるようにしか見えないですよ。」

「とエリザベスは心の中で突っ込んだ」

「それ、エリザベス！心の中で突っ込んでないからw思いつきり言葉に出してるよー！」

「そうですか」

「とりあえず、フラン様。今は各国共に先の戦いの復興をしているのですからその中で舞踏会なんてしたら只でさえ、バカフランってなってるのに、大バカフランって言われますよ？」

「エリザベス・・突っ込みがひどいよ。それにバカフランがベージックになってるのって良く無いと思うよ！」

「そうですか」

「とりあえず、恋を試してみたいのが乙女心ってものなのよねー」

当分、無理だわーとエリザベスは心の中で突っ込んでいた。

とりあえず納得！？（後書き）

エリザベス

「フラン様が納得したようなのでしばらくフラン様の日常は、王宮
日誌に書き留めておきます。」

また、フラン様が投稿するときはぜひ、よろしくお願いします。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1442u/>

フラン姫の一存

2011年6月25日04時38分発行